

8月24日 火垂るの墓

野坂昭如の作品に初めて触れたのは30年ほど前か。その頃はどちらかというと作家よりはテレビタレントというイメージが強く、同時に暴力的なところも強調されていたので、ただでさえ読書嫌いの私の食指が彼の小説に伸びるはずもなかった。

彼が神戸で終戦を迎えた話や、私の生まれた石屋川近くに住んでいたことも知っていたので、嫌いながらも興味のある作家ではあったが、小説を読むきっかけになったのはスタジオジブリによる『火垂るの墓』のアニメ映画化である。手にした第一印象は「クセが強い」というもの。句読点が少なくだらだらしている。饒舌体と言われるそうだが、とにかく切れ目がなく読みづらい。普段の私なら一分で読むのをやめていただろう。しかし、読み進むうちにその「クセ」が心地よくなっていく。おそらく潜在的に映画のイメージがすり込まれていたせいもあるが、当時の鬱屈した感じや人間の本性を描くのに、非常にマッチした文体なのである。

小説はフィクションである。と同時にノンフィクションである。作り事の中に作家が体験した真実がちりばめられる。

先日A先生と神戸に出張に行く機会があった。JRの三ノ宮駅を降りたとき、突然思い出したように「ちょっと寄り道しませんか」とA先生。無言でポートライナーの乗り場に向かって歩き出した。「何かごちそうでもしてくれるのか」との期待空しく、突然立ち止まって鉄橋の一部を指さした。「先生、ここにいくつか穴が開いていますが、これはすべて神戸の空襲の機銃掃射の跡です。ペンキは塗り直されていますが、当時のまま保管されているのです」。そういえば、小説の主人公清太が最期を迎えるのも省線（今のJR）の三ノ宮駅。むせかえるような暑さの中で、戦争を知らない世代の私が、戦争の底知れる恐怖に肉薄した瞬間だった。

